

日本における移動図書館の機能の変遷と現代的な役割

亀山 恵

移動図書館とは、公共図書館のサービスが行き届いていない地域や図書館を訪れる手段を持っていない人々に図書館の資料やサービスを届ける方法である。移動図書館は、1949年以降都道府県立図書館を中心に全国に広がり、運営主体を市町村立図書館に変えつつ、1997年まで活動台数を伸ばしていった。1997年以降、日本の公共図書館による移動図書館の活動台数は減少傾向にあるものの、災害被災地や地域活性化に向けたイベントへの出張といった、移動図書館の特性を最大限に生かした活動が近年活発に行なわれている。

本研究の目的は、移動図書館の機能の歴史的な変遷と現代的な役割を解明することである。研究方法は文献調査であり、日本図書館協会の見解、移動図書館に関心を持つ研究者の見解、移動図書館の実務担当者の見解の3点から分析を行なった。日本図書館協会の見解では日本図書館協会の出版物13件、研究者の見解では雑誌記事・論文24件、実務担当者の見解では雑誌記事・論文43件及び『全国公共図書館研究集会報告書』33件を分析対象とした。また、移動図書館の現代的な役割については、朝日・日経・毎日・読売の各新聞記事337件とカレントアウェアネス・ポータルの記事134件から最近5年間で行なわれた移動図書館を用いた特徴的な活動を事例として取り上げ、今後の移動図書館が果たす役割を分析した。

文献調査の結果、県立図書館による移動図書館の機能の変遷としては、農村への文化全般の持ち込みから読書活動の推進へ、そして図書館設置の機運の醸成へという流れがみられた。県立の移動図書館の普遍的な機能としては、図書館サービスが不十分である地域へのサービスの提供と図書館事業のPRが挙げられる。また、市立図書館による移動図書館の機能の変遷としては、地域における図書館サービス網の整備、図書館事業のPR、分館の代替という3点の機能から、児童の読書環境の整備、コミュニケーションの場の創造、地域の実情に寄り添ったサービスの提供という3点の機能へと移り変わる様子が確認できた。市立の移動図書館の特徴としては、1990年代以降アウトリーチ・サービスとしての役割が盛り上がりを見せていることが挙げられる。また、市立の移動図書館の役割の変遷においては、3点の見解による違いが明らかになった。研究者はアウトリーチ・サービスとしての役割を指摘するのが遅かったが、実務担当者は早い時期からアウトリーチを重視し、移動図書館を活用した児童の読書環境の整備について述べていた。

移動図書館の現代的な役割については、災害被災地における図書館サービスの主導、過疎地での買い物支援、コロナ禍における居場所の創造の3点が解明された。当初、遠隔地サービスとして始まった移動図書館は、現代社会において図書館奉仕網に組み込まれ、図書館を利用することが困難な人々にサービスを届けるという新しい役割を担っているのである。

(指導教員 小泉公乃)